Title	社会性の育成に於ける幼・小関連教育に関する考察 ： 日本の子どもの社会性の認識の発達（その 2）
Author(s)	川村，登喜子
Citation	聖学院大学論叢, 11(4): 21-42
URL	
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

社会性の育成に於ける幼・小関連教育に関する考察

——日本の子どもの社会性の認識の発達（その２）——

川　村　登喜子

Considerations to Promote Socialization Nature in Relation to Kindergarten and Elementary School

——Development of Recognition of Socialization Nature in Japanese Children (2)——

Tokiko KAWAMURA

Socialization is an important part of education in kindergartens as well as in elementary schools. It requires a long-term perspective of development and consistency of education. Until recently, the major part of socialization study in Japan has been concentrated in the area of basic living habits, human relations, feeling and doing. Socialization nature, however, will have to consider the intellectual element.

This study analyzes the development of socialization recognition from infancy to childhood. A data source of this analysis is from questionnaires which were provided to children ranging from 3 years to 9 years old. Currently, a few developments in social phenomena have already been seen. We intend to further pursue the analysis of contents of this inquiry and its result.

はじめに

社会性の育成は幼稚園教育の重要な目標であるが，これは小学校においても重要視されている。子どもの教育においては長期展望に基づく一貫性と発展性が重要である。本研究の特色は社会認識の萌芽期にある幼児期から児童期にかけて社会事象の認識過程を観ていこうとしている。子どもの社会認識の理解とその発達の実態を知ることによって，将来幼稚園から小学校にかけての指導に有益な示唆を与えられることを望んでいる。

Key words; Socialization, Recognition, Kindergarten, Elementary School, Development

研究の目的

これまでの日本における子どもの社会性に関する研究の主なものは「社会的適応性」を発達課題と考え，社会生活に必要な能力として，基本的生活習慣に始まり，対人関係，感情，行動等がその主なものであった。しかし，社会性の問題を考える場合には，子どもの行動側面に知的行動側面も合わせて観察することが必要である。

社会性とは，個人がその社会生活を行っていく上で必要にしてかつ十分に望ましい知識，意識，態度，能力等を習得していく過程を云う。云いかえれば，社会性とは情動的，対人的，知的行動表出などで生ずる発達的変化を統合したものと考えることである。

知的行動側面における子どもの認識の発達研究では Piaget（1972）の Genetic Epistemology（発生的認識論）があげられる。彼は子どもの認識を発生的に研究し，認識のより低いレベルからより高いレベルに変化していく方法論を研究し，知的発達の変化，思考の脱中心化と，環境の諸要因が影響をもたらす認識力の発達段階や知識体系獲得の過程を明らかにした。

認識を考える場合には当然「道徳」もその範疇に入ってくる。Piaget の道徳に関する概念の定義は，基本的な社会的行動様式の共通理解を「道徳」と云う一種の社会規範であるとしている。最近日本でもこの知的側面の研究をとりあげ，認知の一側面として，適切な判断力—愛他行動の研究（祐宗・堂野・松崎，1983，中里，1985）が行われている。このように子どもの認識を考える場合には，当然道徳の問題も総合的にとらえていかなければならない。

これら Piaget その他の研究を踏まえながらここでとりあげようとしているのは，日本の社会における（日本の生活環境，文化を背景とした）子どもの認識の成立過程である。すなわち幼児期から児童期に亘る社会性の認識の発達過程を上記に掲げたような視点から，社会性にかかわる子どもの認識の成立過程を質問紙法による調査によって測定調査し，何らかの指標を作成する。質問内容・方法等に検討を加えながら標準化の方向に研究を進めて行きたい。

研究方法及び内容

(B)客観的認識→(C)主体的認識→(D)体験的認識に至る発達過程における幼児期から児童期に亘る認識の発達基準を作成する[(1)]。子どもが社会事象の認識を身近なことがらを通してどのようにとらえているのかを実体的に把握するため平成元年より調査を行っている。

平成元年度は，調査対象児を3歳児から10歳児とし，プリテストを作成し調査を行い，子どもが社会事象をどのように身近に感じ認識していくかの思考の発達過程を推察しながらプリテストの妥当性の検討と修正を行った。

これまでの分析結果によると，７～８歳児頃から認識の変化期になっている萌しが表れている。しかし前回までの調査では被験児数は40名ずつの少数であったこと，調査地域にも片寄りがあり，正確な実態を把握しているとは云えない。

平成６年度より前回のプリテストの中の質問項目を整理した調査用紙を作成し，調査区域を全国的に広げ，調査対象児も各年令100名ずつとし，次のような計画で調査を行った。

平成７年度よりの調査

1．調査対象児：３歳～９歳・各年令100名ずつ　計700名

2．調査期間：平成７年～平成８年

3．調査地域：北海道・東北・関東・中部・九州地域

4．調査方法：質問紙法。

３歳～６歳児は保育者が面接において子どもの回答そのままを記録した。

７歳～９歳児は子どもが解答用紙に記入した。

5．調査項目：①自己認識　②他者認識（対おとな）　③他者認識（対子ども）　④生物との関係　⑤物との関係　⑥社会事象　の６分野とした。

今回は，表１の質問項目の中から①自己認識　②他者認識（対おとな）　③他者認識（対子ども）④物との関係の分析と考察をする。

(1)　自己認識

『自己認識』の質問項目，No.２「**あなたは男ですか，女ですか**」，No.３「**あなたは他の人よりこんなことができるのはどんなことですか**」，No.４「**あなたは自分の考えがいつも正しいと思いますか**」，No.５「**あなたは大きくなったら何になりたいですか**」と，いう質問を取り上げ集計，分析をし，３歳児から９歳児にわたる認識の芽生えと発達的変化を検討する。

まず，３歳児のみ「**あなたは男ですか，女ですか**」の質問に対し，回答は88名が性別を認識している。

３歳頃から自分を他人と区別し，自己の存在と性別を認識していることが分かった。

No.３「**あなたが他の人よりこんなことができるというのはどんなことですか**」の回答の主なものは，

３歳児―「お友達と遊ぶ」２名，「ブロック」２名，「なわとび」２名，「お絵かき」２名，「ママのお手伝い」「お風呂ができる」「トイレができる」「かけっこ」「でんぐり返し」各１名ずつが主なものである。

３歳児では遊ぶことと，身辺の自立の回答が出ている。

４歳児―新たに出てきた回答

「鉄棒」３名，「サッカー」３名，「逆立ち」「自転車に乗ること」各１名ずつ

表1　質問項目

①自己認識	①あなたの名前は何といいますか。(3歳児のみ) ②あなたは男ですか，女ですか。(3歳児のみ) ③あなたが他の人よりこんなことができるとはどんなことですか。 ④-(1)あなたは自分の考えがいつも正しいと思いますか。 -(2)それはなぜですか。 ⑤-(1)あなたは大きくなったら何になりたいですか。 -(2)それはなぜですか。
②他者認識 (対おとな)	⑥あなたのお父さんのお仕事は何ですか。 -(2)お父さんはどうしてお仕事をするのですか。 ⑦あなたはお父さんのために何かしてあげていることがありますか。 ⑧あなたはお母さんのために何かしてあげていることがありますか。 ⑨どういう人をおとなだと思いますか。 ⑩-(1)大人の考えはいつも正しいと思いますか。 -(2)それはどうしてですか。 ⑪世界で一番えらいと思う人は誰ですか。 -(2)それはどうしてですか。
③他者認識 (対子ども)	⑫お友だちがあなたの大事な物を貸してほしいといったらどうしますか。 ⑬あなたはお友だちが困っていたらどうしますか。 ⑭きまりを守らないお友だちを見たらどうしますか。
④物との関係	⑮ほしい物があったらどうしますか。 ⑯あなたが一番たいせつにしている物はなんですか。 ⑰人間は生きていくためにはどうしても必要な物は何でしょう。
⑤生物との関係	⑱「生きている」とはどういうことですか。 ⑲「死ぬ」とはどういうことですか。 ⑳生き物はいつか死ぬのはなぜでしょう。
⑥社会事象	㉑天気予報は何のためにありますか。 ㉒どうして時計があるのでしょう。 ㉓みんなのためになる仕事をしている人をあげてください。 ㉔日本とはどういう国だと考えますか。

4歳児では身辺の自立の回答がなくなり，日常の行動で自信のあるものの回答に変わってきている。

5歳児―「ちょっとだけ英語ができる」「平均台」「折り紙」「補助なしで自転車に乗れる」「テレビゲーム」「エレクトーン」「バレエ」「ボクシング」等各1名ずつ

6歳児―「泳げる」11名，「勉強」6名，「ピアノが弾ける」4名，「逆上がり」4名，「野球」「お手伝い」2名ずつ，「プリンをつくる」「ドッチボール」「公文」「そろばん」等各1名ずつ

7歳児―「木登り」2名，「国語」「左手で上手に書ける」「本をいっぱい読めること」「バスケット」「一輪車に乗れること」「そろばん」「剣道」「竹馬」「家の掃除」「ファミコン」「音楽がうまい」等各1名ずつ

8歳児―「料理」4名，「字をきれいに書ける」「リレーで一位」「ローラースケート」「二重跳び

が出きる」「跳び箱」「風呂洗い」「タイヤとび」「スキー」「算数」「さいほう」「体育」等各1名ずつ

9歳児―「えんぴつ手品」「左手で物を切る」「野球」「習字」「レスリング」等各1名ずつ

6歳頃より学校での体験や身辺の活動範囲の拡大で運動などの得意とする物をあげ出している。

No. 4「**あなたは自分の考えがいつも正しいと思いますか**」の質問には表2のような結果が出ている。

表2　あなたは自分の考えがいつも正しいと思いますか

年令／回答	正しいと思う	思わない	N. A.	わからない	計
3歳	69	8	13	10	100
4歳	60	16	4	7	100
5歳	51	26	7	16	100
6歳	54	26	3	17	100
7歳	40	56	0	4	100
8歳	20	71	1	8	100
9歳	15	71	2	12	100

3歳児から6歳児までは「正しいと思う」と単純に答えている子が多いが，7歳児からその回答は減少し，否定の回答が増えてきている。

No. 4 -②「**それはなぜですか**」という答えの否定の理由の主なものは，

3歳児　「わからない」

4歳児　「わからない」

5歳児　「間違ったことも言うから」「わからないことがあるから」

6歳児　「わからない」

7歳児　「一生懸命でも違う時が多いから」「なんとなく思わない」「みんなの意見がまとまらないから」「間違えやすい」「勉強ができないから」「少し頭が悪いから」

8歳児　「よく考えてないから」「時々間違える」「間違える場合もあるから」「自分より他の人の答えがいいと思ってしまうから」「頭が悪いから」

9歳児　「違った答えがあるから」「間違ったりするから」「考えが正しくないことがあるから」「自信がありません」

5歳児から「間違ったことも言うから」の回答から9歳児になると「自信がありません」へと思考の変化が見られる。

No. 5「**大きくなったら何になりたいですか**」

3歳児　1位　セーラームーン　　22名

	2位	カクレンジャー	15名
	3位	ウルトラマン	4名
4歳児	1位	セーラームーン	11名
	2位	カクレンジャー	10名
	3位	お花屋	6名
5歳児	1位	サッカー選手	10名
	2位	看護婦さん，セーラームーン	7名
	3位	花屋	6名
6歳児	1位	サッカー選手	6名
	2位	パン屋，ケーキ屋	5名
	3位	花屋，幼稚園の先生	4名
7歳児	1位	サッカー選手	6名
	2位	ケーキ屋，パン屋，花屋	5名
	3位	大工，看護婦	3名
8歳児	1位	サッカー選手，大工	7名
	2位	看護婦	6名
	3位	幼稚園の先生，サッカー選手	5名
9歳児	1位	幼稚園の先生	5名
	2位	お花屋	4名
	3位	サッカー選手，野球選手	3名

3歳児は想像の世界の人物を多くあげている。

4歳児では，想像の人物をあげている子が多いが，現実社会の「花屋」が出てくる。

5歳児　サッカー選手も出てくるがまだ想像の世界の人物をあげている子もある。

6歳児　想像の世界は姿を消し，さまざまな職業名をあげ出している。

7歳児　「大工」が出て来る。

8歳児　「医者」「スチュワーデス」「ピアニスト」「パイロット」等が加わる。

9歳児　1～3位の他に，「コック」「社長」「科学者」「宇宙飛行士」「設計士」「薬剤師」「小学校の先生」「カメラマン」など，多様な職種が出てくる。

No.5-②「**それはなぜですか**」に対し，

3歳児　「どうしてもなりたいから」「好きだから」「かっこいいもん」等，想像の世界を夢見ている。

4歳児　「かっこいい」「わからない」「どうしても」

5歳児　「かわいいから」「はながすきだから」「かっこいいから」

6歳児　「お金がかせげるから」「先生がいい」「花がきれいだから」「なりたい」

7歳児　「サッカーけるのうまいから」「かっこいい」「きれいだから」

8歳児　「お金が入るから」「給料が高いから」

9歳児　「お金がたまるから」「夢だから」「おもしろそうだから」「やってみたい」

6歳児になると現実的な職業の名前をあげだし，想像の世界は姿を消し，「お金がかせげるから」の現実的な回答が出てくる。9歳児になると「お金が入る」の他に現実社会への夢が拡がって行くのが分かった。

(2) 他者認識（対おとな）

『他者認識（対おとな)』の質問項目 No. 6 -(1)「**あなたのお父さんのお仕事はなんですか**」，6 -(2)「**お父さんはどうしてお仕事をするのですか**」，No. 7「**あなたはお父さんのために何かしてあげていることがありますか**」，No. 8「**あなたはお母さんのために何かしてあげていることがありますか**」，No. 9「**どういう人をおとなだと思いますか**」，No. 10「**おとなの考えはいつも正しいと思いますか**」という質問を取り上げ，集計分析をし，3歳児から9歳児にわたる認識の芽生えと発達的変化を検討する。

No. 6 -(1)「**あなたのお父さんのお仕事はなんですか**」に対して，3，4歳児に共通して多い回答は「会社」である。3歳児から職種を答えているが，「歯医者さん」「お医者さん」の2名のみである。これは身近な父親が具体性のある職業についているからこのような回答が3歳児でもでてきていると考えられる。

5歳児では単に「会社」と答える子どもは減り，具体的会社名を行ったり（17名)，職種を言える子どもが増えてくる（16名)。

6，7歳児では，職種に多様な回答が多く見られ，6歳児では「バスの運転手」「ダンプカーの運転手」「ダイビングの先生」，7歳児では，「自動車学校の先生」「高校の先生」等の回答である。

8，9歳児では，会社名に関して「大和生命保険会社」「河津郵便局」「東京電力」「九州電工」のように正確に名称を言える子どもが多くなるとともに，職種に関してもバラエティに富む回答をしている。また「中央病院の先生」「ミクニアディクの課長」「稲取観光ホテルの課長」等，父親の働いている所属機関の名称と役職名が回答できるようになっている。

6歳頃からは比較的落ち着いた安定した時期に入り知育発達が著しくなり，学習する子どもの時代に入るので，父親の職業にも興味，関心を持ち始めているのが分かる。

No. 6 -(2)「**あなたのお父さんはどうしてお仕事をするのですか**」という質問に対する主な回答は，

3歳児では，「お仕事だから」16名，「忙しいから」4名，「会社に行くから」「ご飯が食べられないから」各3名，「おとなだから」「おじいちゃんにおこられるから」「お仕事しないとお金いっぱ

いもらえないから」「食べ物を買うためにお仕事している」各2名である。

4歳児では,「お金をためるため」16名,「お金をもらうから」11名,「働かなきゃ行けないから」7名,「忙しいから」4名,「働いて何か買うため」3名,「おとなだから」2名である。

5歳児では,「お金をためるため」15名,「お給料をもらうため」「ご飯が食べられるように」各7名,「働きたいから」6名,「お金が少ないから」5名,「仕事しないとたくさんお金が入ってこないから」「お金がなくなると困るから」各3名,「みんなのため」「貧乏になってしまうから」各2名である。

6歳児では,「お金をもらうため」19名,「お金がたまるように」7名,「私たちにご飯を食べさせてあげたいから」4名,「みんなのため」3名,「お金持ちになるまで」「お金が足りないから」「頭がよくなる」各2名である。

7歳児では,「お金をもらうため」21名,「家族のため」11名,「お金をためる」8名,「ご飯が食べられるため」3名である。

8歳児では,「家族のため」26名,「お金がたまるように」16名,「お金をもらうため」12名,「みんながご飯を食べられるように」9名,「お金が足りないから」7名,「食べ物や色々買うお金を稼ぐため」4名,「こどものため」「りっぱな家をたてるため」「働かなきゃだめだから」各2名である。

9歳児では,「家族のため」43名,「給料をもらうため」19名,「家の人にご飯を食べさせるため」9名,「お金をためる」「お金がないから」各3名,「生きていくため」2名である。

子どもはかなり早い時機から「仕事をする」ことによってお金が得られることを知っている。「お金をもらう」「お金をためる」等の回答が各年齢において上位を占めていることからみて,仕事が「お金」という具体的な報酬に結びついていることや「生活のため」であることを身近な経験から認識している。

表3はNo.7「**あなたはお父さんのために何かしてあげていることがありますか**」と,表4はNo.8「**あなたはお母さんのために何かしてあげていることがありますか**」に対する解答を示したものである。

表3　あなたはお父さんのために何かしてあげていることがありますか

年令／回答	ある	ない	N. A.	わからない	計
3歳	42	11	22	25	100
4歳	60	17	14	9	100
5歳	66	23	4	4	100
6歳	55	25	10	10	100
7歳	67	21	4	8	100
8歳	72	21	1	6	100
9歳	74	15	5	6	100

表4　あなたはお母さんのために何かしてあげていることがありますか

年令／回答	ある	ない	N. A.	わからない	計
3歳	49	11	19	21	100
4歳	73	8	9	10	100
5歳	82	12	1	5	100
6歳	70	9	7	14	100
7歳	85	11	1	3	100
8歳	77	15	2	6	100
9歳	86	6	4	4	100

No. 7の父親に対しての3歳児の主な解答は，「遊んであげる」である。4歳頃から回答数が増えていき，4～9歳児までの共通する多い回答の順位は，「肩たたき・肩もみ」「お手伝い」「ビール・お酒をもっていく」である。

No. 8の母親に対しての3歳児の主な回答は，「お手伝い」「遊んであげる」であり，4～9歳までの共通する多い回答の順位は「お手伝い」「肩たたき・肩もみ」である。

3歳児では，自己中心的思考が中心であるため，「人のために何かしてあげられる」ということを考えられる子どもは，身近な父親や母親に対しても半数以下であるが，4歳頃から他者の気持やその場の状況を汲み取ることが徐々に考えられるようになってきていることが分かる。

No. 9「**どういう人をおとなだと思いますか**」の主な回答は以下のとおりである。

3歳児―「お父さん」12名，「お母さん」11名，「お父さんとお母さん」10名，「おっきい人」3名，「おとな」「お兄ちゃん」各2名

4歳児―「お父さんとお母さん」18名，「お父さん」16名，「お母さん」「おっきい人」各7名，「おじいちゃん，おばあちゃん」「おとな」各4名，「おりこうな人」3名，「えらい人」2名

5歳児―「大きい人・背が高い人」19名，「お父さん」「お父さんとお母さん」各13名，「お母さん」8名，「働いている人」7名，「先生」3名，「優しい人」「おとな」各2名

6歳児―「優しい人」13名，「大きい人・背が高い人」12名，「お母さん」11名，「偉い人」5名，「お父さん」3名，「お父さんとお母さん」2名

7歳児―「大きい人・背が高い人」21名，「頭がいい人」6名，「結婚した人」5名，「20歳以上の人」「お父さん」「先生」各4名，「優しい人」3名

8歳児―「20歳以上の人」11名，「仕事をしている人」14名，「大きい人・背が高い人」8名，「偉い人」5名，「お父さん・お母さん」4名，「頭がいい人」「物知りな人」各3名

9歳児―「20歳以上の人」12名，「大きくて頭のいい人」10名，「優しい人」「仕事をしている人」各7名，「偉い人」5名，「背が高い人」4名，「お父さんとお母さん」「みんなのことも考えている人」各3名，「正しいことをする人」「人のために役立つ人」「お父さん」各2名

3，4歳児は父親や母親等の身近な人を対象に取り上げているが，5歳頃から「働いている人」

「先生」等，少しずつ外界へ目が向き始めているのが分かる。また，「大きい人・背の高い人」という知覚的印象をもとにした回答が出ている。7歳頃より「20歳以上の人」「優しい人」「仕事をしている人」等の回答がみられ，9歳児になると，少数ではあるが，「みんなのことも考えている人」「正しいことをする人」「人のために役立つ人」というように，物事を論理的，抽象的に考えられうようになってきていることがわかる。

No. 10-(1)「**おとなの考えはいつも正しいと思いますか**」に対する回答は表5に示した。

表5　おとなの考えはいつも正しいと思いますか

年令／回答	思う	思わない	N. A.	わからない	計
3歳	61	12	17	10	100
4歳	82	14	2	2	100
5歳	89	4	1	6	100
6歳	68	17	7	8	100
7歳	64	31	1	4	100
8歳	63	28	1	8	100
9歳	39	52	1	8	100

「おとなの考えがいつも正しいとは思わない」と答える子どもは3歳児からみられるが，7歳を境にして「思わない」子どもが増加し，9歳児では52名となり逆転している。その主な回答に「おとなでも間違えることがある」24名，「うそを言っているかもしれないから」7名等様々な答えがでてきている。また，この年齢の特徴として，「時々正しいとは思わない」「あまり正しくない」「たまに」「違うこともまじっている」等の回答のように，どちらとも言えないことを示す回答が12名であり，おとなへの絶対的信頼感が薄らいで，現実的，客観的に物事をみるようになってきていることがわかる。

6歳頃より思考は分析的となり，反省しつつ客観的な要素を関係づけるようになるといわれている。また自己中心的な思考から脱却して客観的思考へ移行するため，7歳児でこのような発達的変化が顕著に現れているのだと考えられる。物事を一面的にみることから，しだいにいろいろな角度から検討し，論理的に考えていく力が獲得されてきていることがわかる。

No. 11-(1)「**世界で一番偉いと思う人は誰ですか**」の質問に対する回答は表6のとおりである。

3歳児―1位は「友達」，2位「母親」，3位「父親」，4位「兄」，5位「姉」「祖母」，「先生」である。No. 11-(2)「**それはどうしてですか**」の問いに，1位の「友達」と上げた理由は「えらい」「かっこいい」「おりこうしている」「好きだから」等であった。この時期は家庭での大人との関係と平行して集団生活で友達との関係をつくりはじめ，周辺の友達に関心が向けられ出し，自分と違った行動ができる友達に感嘆し模倣しだす特徴が顕著に表れている。2位の「母親」はまだ依存の対象として母親を尊敬している子が多い一面，3位「父親」の力強さも認識しだしている。3歳児のみ「カイジュウ」「カクレンジャー」等の答えを見ても分かるように，フィクションの世界と現

表6　世界で一番偉いと思う人は誰ですか

人物名	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳
友達	30	18	4	2	4	1	0
母親	18	16	15	13	5	12	13
父親	13	21	24	9	10	15	11
家族	0	0	0	0	0	2	2
兄	5	2	3	0	0	0	0
姉	3	2	3	0	0	0	0
祖父	2	1	2	2	0	0	1
祖母	3	0	2	2	1	0	1
先生	3	5	6	5	4	0	1
カイジュウ	3	0	0	0	0	0	0
カクレンジャー	1	0	0	0	0	0	0
大統領	0	0	0	11	11	12	7
総理大臣	0	1	2	9	9	8	18
神様	0	1	2	2	17	9	2
自分	0	6	1	0	0	1	1
社長	0	1	3	1	1	0	0
大工	0	0	0	1	1	0	0
科学者	0	0	0	1	1	1	5
天皇陛下	0	0	0	0	0	3	2
皇太子	0	0	0	0	0	0	5
いない	0	0	1	3	1	6	1
ＮＡ・わからない	23	22	21	35	16	24	25

実の世界を混在して捉えているのが現れている。

4歳児―1位が「父親」，2位「友達」，3位「母親」というように変化がみられる。1位の「父親」の理由は「働いているから」「面倒みてくれるから」等があげられている。ここであらたに『自分』が偉いという答え（6名）がでてきている。この頃から身体活動能力の増大によって，自信が増してくる。この変化が現れているのであろう。この「自分」に対する理由づけは「おりこうだから」「掃除もちゃんとしているから」「自分は神様の心だから」等である。4歳児は自己の拡大期であるといえよう。5歳児になると「自分」は1名のみに減っていることから見ても4歳児の特徴と見られよう。

5歳児―「父親」が1位，2位は「母親」である。父親の存在感を強く認識しだしている時期である。その理由は「仕事をしているから」「おおきいから」「こわいから」「頭がいいから」等である。

6歳児―数字の上では「母親」（13名）が1位になっているがこの年齢から「大統領」と「総理大臣」が合計すると20名で1位となる。その理由は「新聞にのっている」「偉いから」「地球を守るから」等である。6歳児ではまだ「大統領」と「総理大臣」の区別ができていず，どちらかこの世

の権力者をあげたとみてよいであろう。したがって，6歳児から「父親」にかわって世界の権力者を偉いと認識しだした時期と考えられよう。3歳児のフィクションの世界から本当の世界を求めるようになり，新しい現実主義的態度が始まっている時期であるとみてよいであろう。

7歳児―7歳児でも「大統領」と「総理大臣」がトップになっているが，「神様」が出てくる。日常にある現実世界を超えた超現実的，非現実的世界について考え出してきた時期であるといえよう。これは一般社会の認識，すなわち社会通念が次第に学習され，取り入れられているとみてよいだろう。そして，このあたりの時期は主観的態度から客観的態度へ移行していく時期とみられよう。「神様」と答えた理由は「地球を造ったから」「願いを叶えてくれる」「天国にいるから」「皆を守ってくれる」等でこの世の権力者についで「神様」を認識しだし始めていると捉えてよいのではないだろうか。

8歳児―「天皇陛下」が出てきている。その理由は「偉い人だと思うから」等で「天皇陛下」の存在も認識しだしている。

9歳児―1位は「総理大臣」次いで「母親」「大統領」「父親」と続き，「皇太子」「科学者」がでている。「天皇陛下」「皇太子」と答えた理由は「日本で一番偉い人だから」等である。

ま と め

3歳頃になると母親の膝から離れ，周辺領域の「友達」に目が注がれはじめ，友達を自分より優れた偉い者と認識している時期であると考えられる。また，架空の世界の人物の存在を信じている子どももいる。

4歳児は「友達」の数は減少し，「父親」の存在の大きさを認識するとともに，一方では自分に対する自信が増してくる時期である。

5歳児になると「父親」と「母親」を中心に「家族」に目が向けられている。

6歳児からは「父親」よりもこの世の権力者の存在を認識しだしている。

7歳児は「神」の存在を認識しているのが目立った。

8歳児は「天皇陛下」を，9歳児は「皇太子」「科学者」とその範囲が広がっていくのが分かる。

子どもが家庭・幼稚園や保育所から学校へと移行するにつれて「世界で一番偉い人」に対する認識も主観的態度から客観的態度へ移行しているが，それは6歳児から現実主義的認識に変化しはじめている。子どもの思考力に最も意図的・積極的に刺激を与えているのが学校教育であるが，現代では「情報刺激」も大きな影響を与えているのではないかと考えられる。

(3) 他者認識（対子ども）

No. 12「**お友達があなたの大事な者を貸してほしいといったらどうしますか**」について述べてい

く。

表7にNo.12の回答結果を示した。

3歳児では，「N. A.」8名，「わからない」27名は両回答とも全年齢児の中では一番多い回答数であった。「貸す」(45名) と答えた子どもの解答をみてみると「貸してあげる」「いいよっていうの」といったように単純な答え方が多い。また，「貸さない」(20名) と答えた子どもの解答をみると「だめ」「いやだ」という簡潔な答え方である。

表7　お友達があなたの大事な物を貸してほしいといったらどうしますか

年令／回答	貸す	貸さない	N. A.	わからない
3歳	45	20	8	27
4歳	82	9	4	5
5歳	81	13	1	5
6歳	45	34	6	15
7歳	42	55	1	2
8歳	42	52	0	6
9歳	44	48	3	5

4歳児から「N. A.」(4名)，「わからない」(5名) の回答はともに減少している。「貸す」と答えた子どもは82名であり，全年齢児の中では一番多い回答数である。一方「貸さない」と答えた子どもは9名のみであり全年齢児の中では一番少ない回答数である。「貸す」という回答をみてみると3歳児と同じような単純な答え方が大部分を占めるが，「貸してあげる明日返してねっていう」「ちょっとだけねという」「少しだけ貸してあげる」といったような条件付きの回答が2，3でてきていることに注目したい。

5歳児では「N. A.」1名，「わからない」は5名であり，「貸す」と答えた子どもは81名と4歳児についで2番目に回答数が多い。その回答をみると単純に「貸してあげる」という答え方が圧倒的であるが，4歳児同様条件付きが少数みられる。「貸さない」(13名) という回答の中には「だめだよという。2個あったらいい」というように全面的否定ではなく余分があったら貸す気があることを示す回答や「どうしようかな，貸してあげない」といったように少し迷ってから答える子どももみられる。

6歳児では「N. A.」6名，「わからない」は15名であり，「貸す」と答えた子どもは45名，「貸さない」の回答は34名であった。4歳児，5歳児に比べると「貸す」という回答が約半数に減少し，逆に「貸さない」という回答が増えてきている。「貸す」「貸さない」の両回答ともほとんどが単純な答え方であった。

7歳児では「N. A.」1名，「わからない」は2名であり，「貸す」と答えた子どもは42名，「貸さない」と答えた子どもは55名であった。「貸す」と答えた子どもの回答を見ると，「貸してあげる」という単純な答え方から「友達の大事な物を貸してほしいという」といった交換条件を持ち出す回

答や「一日だけ貸す」「半日貸す」のように期限付きで貸す回答も出てきている。また，「貸さない」という回答には，「貸さないよ，お母さんがいやよといいます」とか「だめ大切だから，といいます」「なくすかもしれないから貸さない」といったように理由づけをして答える子どもがいたり，「ちがうの貸してやろうか」「お父さんがいいといったら貸してあげてだめといったらだめ」という回答のように婉曲に断る子どももでてきている。

8歳児では「N. A.」0名，「わからない」は6名であり「貸す」と答えた子どもは42名，「貸さない」と答えた子どもは52名であった。「貸す」と答えた子どもの回答をみると「わけを聞いて決める」「きちんと返してくれるなら貸すかもしれない」「悪いことに使わなかったら貸す」「少し迷うけど貸す」「わけを聞いてから返してもらう日を決めて貸してあげる」等々，理由を聞いたり返却の期限や条件を出したりとかなり多様な回答が出てきている。一方，「貸さない」と答えた子どもの回答においても「大事な物だからこれ貸せないごめんね」「指一本も触れさせない」「見せてあげるくらいならいいよ」「壊されたりしたらいやだから貸してあげないと思います」といったように自分の大事な物に対する所有意識が強い回答が見受けられる。

9歳児では「N. A.」3名，「わからない」は5名であり，「貸す」と答えた子どもは44名，「貸さない」と答えた子どもは48名であった。「貸す」と答えた子どもの解答を見ると「大雪にしてくれといって貸してあげる」「壊さないなら貸す」「とても大事な物だときれいに使ってねといって貸してあげます」「ちゃんと返すなら貸してあげる」といったように返却や取り扱いの約束を条件に入れて貸している。また，「事情を聞く」「話したり相談したりしてよかったら貸す」「よく考えてから判断する」等の回答のように相手の話を聞いてから貸すことを判断する内容の回答も出てきている。他に「その人の大事な物と取り替える」といった交換条件を出しているものや，「場合によって貸す」「やさしい人だったら貸してあげる」といったようにその場の状況や人を見て判断する回答が出てきている。「貸さない」と答えた子どもの解答を見ると「いくらお友達でも貸してあげられない」「わけをいって貸さない」「あまり貸さない」「がまんしてもらう」といったように，友達でも自分の大事な物は貸さないと考える子どもや理由を相手に言って断る解答が見られる。

ま と め

No. 12「お友だちがあなたの大事な物を貸してほしいといったらどうしますか」に対する3歳児から9歳児までの回答を全体的にみてみると，「N. A.」「わからない」は3歳児に一番多くみられる。これは3歳児では質問の意味自体がまだ理解できない子どももいるためと考えられる。また，3歳児では単純に「貸す」という回答が多く出ている。目の前のその時々の具体的・断片的な事柄に興味がひかれている時期であり，それらの相互間の関係を考えたり，個々の事象の原因を体系的に追求したりすることはまだ無理である。そのため，単にそこで欲しい物は貸すという単純な回答

になる。前後の関連性もなく，ただ良いこととして「貸す」としているのではないだろうか。従って，現実的に3歳児が目の前の自分の大切な物を貸すということに直面した場合，このような数値が出てくるとは考えられない。好意として「貸す」という行動をとることになるのではないだろうか。

4歳児，5歳児の回答の特徴としてあげられることは，「貸す」と答えた子どもが圧倒的に多く，全体の8割を超えていることである。これらの年齢になると「貸す」という単純な回答が大部分を占めるが2，3の少数回答ではあるが，条件付きで貸す回答が出てきていることに注目したい。又，4歳児と5歳児の全体的回答数値は大きな相違は見られないが，「貸さない」という回答で4歳児には見られなかった解答として5歳児の回答の中に，余分があったら貸すことを示す断り方や迷ってから貸さないという回答が出てきていることである。

6歳児は「貸す」という回答が「貸さない」という回答をやや上回っている一方で，「わからない」と答える子どもも15名いる。4，5歳児と比べると「貸す」と答えた子どもが約半数に減少している。相手が何故貸して欲しいのかその理由を尋ねたり，返却期限を決めたりして，単純に相手の要求に対して添う行動を控える傾向が出てきている。6歳児は幼児期から児童期への移行期であり，これらのことから見ても分かるように，自分の大事な物に対する認識が形成されてきている。

7歳児及び8歳児，9歳児になると，他の年齢時と大きく違う点は「貸さない」という回答が「貸す」という回答を若干ではあるが上回っていることである。3～6歳児までは「貸す」と答える子どもが多かったのに対して，7～9歳児では「貸さない」と答える子どもが多くなり逆転しているのが特徴といえる。また「貸す」「貸さない」の両回答において単純に回答は減少している。年齢が上がるとともに条件つき回答や相手の反応をみる解答が増加してきている。ここで考えられることは，年齢の上昇とともに科学的，合理的に思考する能力が発達し，また理科的興味や人間社会に対する知識への欲求へと発展していく。従って，理由を聞いたり，期限を限定したり，使用条件をつけるといったように自分の大事な物を人に貸すとどのようになるかを想定して条件を相手に貸す現実的な回答が多くみられるようになる。また，相手の人物を見て貸すことを決めることもしている。このように児童期になるにつれて，対物認知や対人認知，状況判断をして貸すことを考えるような答えになってくることがわかる。

(3)-2　他者認識（対子ども）②

No. 13「**あなたはお友だちが困っていたらどうしますか**」，No. 14「**決まりを守らないお友だちを見たらどうしますか**」をとりあげ集計，分析をした。

まず最初に，「他者認識（対子ども）」のNo. 13「**あなたはお友だちが困っていたらどうしますか**」に対して，各年齢に共通して出ている回答は「助けてあげる」である。

3歳児では「N. A.」(19名)，「わからない」(55名) が過半数を占めており，質問の意味がよく

表8　あなたはお友だちが困っていたらどうしますか

年令／回答	N. A.	肯定的回答	否定的回答	わからない	合計
3歳	19	22	4	55	100
4歳	5	74	6	15	100
5歳	2	79	0	19	100
6歳	4	69	0	29	100
7歳	0	94	4	6	100
8歳	0	92	4	4	100
9歳	3	83	4	10	100

理解できない子どもも多い。肯定的回答として多いのは「助けてあげる」(6名),「どうしたのっていう」(3名)「こまったなあっていう」(2名) のほか,「守ってあげる」「先生を呼ぶ」「なぜなぜする」などの回答が出ている。否定的回答としては「いやだ」(4名) があり，情緒的反応が現れている。

4歳児の肯定的回答は多い順に「助けてあげる」(23名),「どうしたのってきく」(8名),「先生に言う」(7名),「やさしくする」「遊んであげる」(各6名),「だいじょうぶという」「なんかしてあげる」(各3名) があるほか,「よしよしする」「おもちゃあげる」といった自分が困った時に大人からしてもらったような言動がここに示されていると考えられる。否定的回答として「いやだ」「だめ」(各2名) という情緒的反応のほかに「助けないかも」「逃げる」といった傍観者的味方やいやな場面をさける言動も見られた。

5歳児における肯定的回答は「助けてあげる」(49名),「どうしたのと聞く」(8名),「先生をよぶ」(5名),「教えてあげる」(4名),「やさしくしてあげる」(3名),「手伝ってあげる」(2名) などがある。

6歳児の肯定的回答は多い順に「助けてあげる」(36名),「教えてあげる」(15名),「やさしくする」(5名),「どうしたのときく」(3名),「なぐさめてあげる」(2名) などがある。

7歳児の肯定的回答の中で最も多いのは「助けてあげる」(60名) であり，ついで「なぐさめてあげる」(11名),「どうしたのときく」(9名),「教える」(5名),「相談にのる」(4名),「なにかきく」(3名) と続く。ほかに「しらんぷりしないでみにいく」「おとなを呼ぶ」「一緒に勉強する」などの回答がある。

8歳児の肯定的回答としてやはり「助けてあげる」(64名) が一番多く,「なぐさめる」(6名)「相談にのる」(5名),「声をかけてあげる」「わけを聞く」(各4名),「さがしてやる」「なんとかする」(各2名) のほかに,「一緒に手伝ってあげる」「協力してあげる」「何か役に立つことをしてあげる」などが出ている。否定的回答として「しらんぷり」(2名),「何もしない」「そのままにしておく」といったように友達が困っている状況に目をつぶる回答も出ている。

9歳児の肯定的回答として「助けてあげる」(57名),「わけをきく」(12名),「相談にのる」(6

名),「教える」(2名) のほかに,「少し手助けをする」「できることならしてあげる」といった自分の力量や余力を見極めてから援助する範囲を決める回答も出ている。また,否定的回答にも「ほっておく」「にげる」の他に,「きらいな人だったらほっておく」「しらんふりしているが場合によっては助ける」のようにその人物と自分の関係を考えてから判断している回答も出てきている。単に困っている友達に援助をするという直線的行為から自分の利害関係を考えて行動を起こすか否かを判断基準にしている。物事を一方向だけでなく,様々な角度から検討していく力がついてきた証拠でもあり,思考の働きが拡大していることが分かる。

次に,No. 14「**きまりを守らないお友だちを見たらどうしますか**」に対して,3歳児の回答は「N. A.」(22名),「わからない」(46名) と約7割を占めるが,「おこる」「だめっていう」(各5名),「わるい」(3名),「先生にいう」「注意する」(各2名) のほか,「あたまをたたく」「かみのけをひっぱる」「きもちよくない」など何らかの言動を示す解答が3割近くもあった。

4歳児では「N. A.」(9名),「わからない」(20名) と減り,「だめっていう」(14名),「先生にいう」(8名),「おこる」(7名),「守らせるようにいう」「注意する」(各5名),「困る」「教えてあげる」(各4名) と続く。

5歳児では「N. A.」(5名),「わからない」(28名) は4歳児とほぼ変わらず,「だめだよという」(16名),「守らなきゃいけないという」「おこる」(各7名),「教えてあげる」(6名),「先生にいう」「注意する」(各4名) と続く。

6歳児では「N. A.」(4名),「わからない」(21名) であり,「注意する」(39名),「教える」(13名),「だめだという」(7名),「やだ」(5名) のほかに「先生にいう」「おこる」「とめる」などがある。

7歳児では「N. A.」(3名),「わからない」(4名) であり,約9割の子どもが回答している最も多いのは「注意する」(54名) であり,ついで「だめだという」「教えてあげる (各6名),「おこる」(5名),「先生にいう」「決まりを守らせる」(各4名) などが出ている。

8歳児では「N. A.」はなく,「わからない」も3名だけである。7歳児同様最も多い回答は「注意する」(63名) であり,ついで「おこる」(7名),「先生にいう」(6名),「ほっておく」(3名) のほかに,「ころす」「しかる」「こらしめる」「にらむ」など懲罰適言動を示す回答が多く出てくる。また,「ほっておく」(3名),「どうしようもない」「無視」(各2名),「にげる」といった回答のように無関心,無視の言動も目立った。

9歳児では「N. A.」(1名),「わからない」(6名) であった。最も多い回答は「注意する」(68名) であり,ついで「先生に言う」(7名),「注意したいけれどなかなか勇気が出ない」(2名),「私より年下だったらいう」といった自分の現在の状態や他者との力関係を考える解答が見られることが特徴といえる。その他,「にげる」(3名)「何もしない」「かくれる」といった8歳児からみられる無関心,無視またはその場面からの逃避を示す回答も出ている。

(4) 物との関係

(4)「他者認識（対子ども）」の報告に続き，ここでは子どもが物に対してどのような認識を持って発達的変化をするかをみることする。

「物との関係」の質問項目 No. 15「**ほしいものがあったらどうしますか**」，No. 16「**あなたが一番たいせつにしている物は何ですか**」，No. 17「**人間が生きていくためにどうしても必要な物は何でしょう**」の質問を取り上げ，3歳児から9歳児にわたる発達的変化を検討する。

No. 15「**ほしいものがあったらどうしますか**」に対する回答の結果は表9の通りである。

表9　ほしいものがあったらどうしますか

年齢＼回答	ほしいという	買ってもらう	買ってくる	自分のお金で買う	誕生日に買ってもらう	がまんする	その他	N. A.	わからない
3歳児	3	1	13	0	1	2	23	12	45
4歳児	2	35	7	3	0	4	33	6	16
5歳児	2	16	12	12	1	5	33	0	14
6歳児	1	25	13	4	0	28	19	2	18
7歳児	9	18	8	4	1	5	51	0	4
8歳児	8	9	11	10	4	14	39	0	5
9歳児	4	6	5	8	6	18	46	3	4

3歳児―「わからない」45名，「買ってくる」13名，「N. A.」12名で，「ほしいものがあったら」という言葉の意味を具体的に考えられない子どもが多い。「ほしいもの」＝「買う」という単純な思考の段階でもあろう。

4歳児―3歳児の「買ってくる」という単純な回答は減って，「買ってもらう」35名と増えてくる。「わからない」の回答も減る。ほしいものは大人から与えられるという認識の変化であろう。

5歳児―「自分のお金で」12名の回答数が増えてくる。これはお小遣いが与えられはじめている時期とみてよいであろう。

6歳児―「我慢する」28名という回答が増え，全年齢児を通して一番多く出ている。一方「その他」の項目が減って，「買ってもらう」25名が増えている。6歳頃から現実主義的認識に変化しはじめている時期である。

7歳児―「買ってもらう」18名は6歳児より減り，「その他」の項目が全年齢児を通して一番多い。例えば，「買ってくれたら買ってもらう」「お金をためてから」「百円をもらったら」「親に聞く」「たまに自分で買って，時々買ってもらう」「安い物だったら買ってもらう」と，回答の中に考え方の複雑さが表われだしている。「がまんする」5名は6歳児より減っている。

8歳児―「その他」39名と7歳児より減っているが例を上げると，「よく考えてお父さんかお母さんに買ってもらう」「えんりょする」「だめといわれたらがまんする」「わめく」「ごろつく」等，

7歳児と同じような表現である。

9歳児―「その他」46名，7歳児より回答は減ってはいるが，8歳児より増えてきている。「父さんやお母さんに相談して買う」「買うかもしれないし，買わないかもしれない」「安かったら買う」「誕生日まで待つ」「買ってもらうか，買うのをやめる」と7歳児同様の回答内容ではあるが，欲しい物に対する快傑の方法を色々考えて回答している。

以上のように，7歳頃から自分の家庭の経済状態や親からの制限があったりすると，お金に対する認識が出てきて，単純に欲しい物を手にいれることは物によっては簡単でないことに気付きはじめることであろう。つまり，3歳児の欲しい物は簡単に与えられるという段階から7歳児あたりで現実的に考え出す時期とみられよう。

No. 16「**あなたが一番たいせつにしている物は何ですか**」の回答の結果は表10の通りである。

3歳児―「おもちゃ」21名で1位。3歳児にとっておもちゃが必要不可欠なものであろう。「大切な物」に「友達」5名，「お母さん」4名で「人」と「物」の区別も分からない子もいる。「N. A.」16名，「わからない」16名と「大切な物」という思考がまだ芽生えていない子どももいる。

4歳児―「おもちゃ」31名で1位。4歳児でもまだ「大切な物」に「友達」2名，「お母さん」2名と答えている子もある。「物」という言葉の意味が理解されていないのであろう。

5歳児―「おもちゃ」19名は減って，「その他」51名が1位になり，「サイフ」「手帳」「手紙」など種々のものをあげている。自分の周辺の「遊び」の物を大切と考えているが，一方，身近な物，例えば上記のような生活周辺の小物にも目を向けるようになっている。

6歳児―「お金」12名，「机」5名も出てくる。お金に対する意味が認識されはじめた時期といえよう。「机」は小学校に入学した時期でもあるから，それを一番大切に考えている子もいる。

表10　あなたが一番大切にしている物は何ですか

回答／年齢	おもちゃ	ウルトラマン	ともだち	お母さん	人形	お金	机	うで時計	本	その他	N. A.	わからない
3歳児	21	5	5	4	0	0	0	0	0	33	16	16
4歳児	31	1	2	2	10	0	0	0	0	42	6	6
5歳児	19	0	0	0	8	0	0	0	0	51	5	19
6歳児	10	0	0	0	5	12	5	0	0	26	7	35
7歳児	5	0	0	0	3	6	6	0	0	23	0	57
8歳児	3	0	0	0	4	7	0	5	0	55	2	34
9歳児	1	0	0	0	3	6	1	0	4	27	4	54

7歳児―「わからない」57名と半数以上の回答が出ている。これは「おもちゃ」「お金」と単純に答えられるのではなく，思考が複雑化したように考え出す時期であろう。

8歳児―「うで時計」5名，うで時計を持ちはじめているのでこれをあげているのであろう。しかし，「その他」55名と1位で，大切な物と考えているものの種類が増えていることをあらわして

いる。

9歳児―「本」4名が出てくる。「その他」の項目は「タイムカプセル」「金メダル」「プラモデル」「植物」等，大切な物に対する種類が増えている。

No. 17「**人間が生きていくためにどうしても必要な物は何でしょう**」に対する回答の結果は表11の通りである。

3歳児―「食物」0名である。「N. A.」33名，「わからない」49名とほとんどが「生きていくため」という言葉の意味が理解されていない。

4歳児―「食物」15名が出てくる。「会社」とか「クスリ」「心臓」「命」というような「生きていくために…」の質問に答えようとしている。

5歳児―「食物」26名，「お金」6名，現実的に「生きていくために必要な物」が認識されだしていると見てよいであろう。

表11　人間が生きていくためにどうしても必要な物は何でしょう

回答／年齢	お母さん	おもちゃ	食物	命	お金	クスリ	心臓	会社	その他	N. A.	わからない
3歳児	3	2	0	0	0	0	0	0	13	33	49
4歳児	0	0	15	4	0	3	4	5	15	15	39
5歳児	0	0	26	5	6	3	8	0	26	3	23
6歳児	0	0	29	5	8	0	6	0	26	3	23
7歳児	0	0	36	13	10	0	9	0	29	0	3
8歳児	0	0	40	8	10	1	6	0	25	0	7
9歳児	0	0	49	10	14	0	1	0	22	4	0

6歳児―「食物」29名，「お金」8名，5歳児より増えだしている。

7歳児―「わからない」（3名）の回答数が減っている。「命」13名と増えているが，「命」を物としてとらえるよりも，「生きていくために…」の意味として「命」ということを認識しだしているのかとも考えられる。

8歳児―「食物」40名，「お金」10名と現実的な回答が増えだしている。

9歳児―「食物」49名，「お金」14名，「命」10名「わからない」0名，6歳頃から徐々に現実的な回答数が増え出している。

No. 17の回答の仕方は一つには生命維持の観点と，身体そのもの「心臓」とかの答えと，生きていく手段の「物」たとえば「食物」とか「お金」をあげている。質問の内容は少しおおざっぱであったかもしれないが，3～9歳までの「生きていくために必要な物」という考え方の変化を漠然としてではあるが，発達的な変化が理解されよう。以上，No. 15，No. 16，No. 17の質問を通して子どもが「物」に対してどのように認識し，発達的に変化していくのかの一端をみることができたといえるのではなかろうか。

研究のまとめと今後の展望

1) 前回の予備調査の質問項目の内容と回答の分析を行い，質問項目の妥当性を検討し，5項目の質問項目にまとめ直し，調査を行った。

2) 今回は，①自己認識，②対人関係（対おとな），③対人関係（対子ども），④物との関係，についての分析と考察を行った。

今後は，⑤生物との関係，⑥社会事象，の分析をし，各年齢毎の認識の発達変化を，全体的にまとめ直し，子どもの社会認識の発達のプロフィールを観ていこうとしている。

なお，この研究は，駒沢女子短期大学の高玉和子氏との共同研究の分析結果をまとめさせていただいたことを付記しておく。

謝　辞

本研究を進めるに当って多くの方々の御協力，並びに御助言を頂いたことに対して深く感謝いたします。

注

(1) 「社会認識」の発展段階を簡潔に述べる

子どもの認識成立の発達過程は，(A)感性的認識→(B)客観的認識→(C)主体的認識→(D)体験的認識に到達する。

(A)の感性的認識は，乳児期の微笑反応に始まる母子関係から，周辺環境への発達過程をさし，認識活動の前段階である。

(B)の客観的認識は，探求心に支えられた対象の本質を客観化する4つの段階の中心である。

(C)の主体的認識は，自己の内部構造を拡大し，深化し，自己の確立に役立てる段階である。

この(A)～(C)の段階をふんで社会事象の本質を把握し，行動の自己決定がなされると考える。子どもの認識の発達過程はおおむね(A)～(C)の3つの段階を中心に社会認識も発展すると考えられる（大森・川村・永田，1985）。

引用文献

(1) J. Piaget「Genetic Epistemology」 Columbia University Press 1970

(1)' 芳賀純訳，ピアジェ「発生的認識論」評論社，1972

(2) J. Piaget: Les Me 'canismes Perceptifs Press Universitaires de Gravee 1961 (The Mecanism of Perception. Tr. by G. N. Seagrim. Routledge Kagan Paul. 1969)

(3) 三木安正「新S－M社会生活能力検査—乳幼児～中学生—」日本文化科学社，1982

(4) 中里至正「道徳的行動の心理学」有斐閣選書，1985

(5) 大森照夫「新社会科教育基本用語辞典」明治図書，1986

(6) 大森照夫・川村登喜子・永田景子「社会性育成における幼・小関連教育」日本保育学会第35回大会論文集，1985

(7) 祐宗省三・堂野恵子・松崎学「思いやりの心を育てる」有斐閣新書，1983

(8) 鈴木清「田研究社会成熟度診断検査手引―3歳～小学１年適用―」日本文化科学社
(9) 津守眞「乳幼児精神発達診断法―０歳～３歳―」大日本図書，1961
(10) 津守眞「乳幼児精神発達診断法―３歳～７歳―」大日本図書，1965
(11) 川村登喜子・高玉和子「社会性の育成に於ける幼・小の関連教育」日本保育学会第48回大会論文集、1995
(12) 川村登喜子・高玉和子「社会性の育成に於ける幼・小の関連教育」日本保育学会第49回大会論文集、1996
(13) 川村登喜子・高玉和子「社会性の育成に於ける幼・小の関連教育」日本保育学会第50回大会論文集、1997
(14) 川村登喜子・高玉和子「社会性の育成に於ける幼・小の関連教育」日本保育学会第51回大会論文集、1998